

羽賀しげ子

不知火記

海辺の聞き書

新曜社

羽賀しげ子

不知火記

海辺の聞き書



新曜社

著者紹介

羽賀しげ子（はが・しげこ）

1953年 東京生まれ。

1976年 東京経済大学卒業。

同年より、第一期不知火海総合学術調査団に参加（事務局）。

1981年より、第二期不知火海総合学術調査団
団員、現在にいたる。



水俣＝語りつき1

不知火記——海辺の聞き書

初版第1刷発行 昭和60年6月25日 ©

著者 羽賀しげ子

発行者 堀江 洪

発行所 株式会社 新曜社

〒101 東京都千代田区神田神保町2-10多田ビル
電話 (03) 264-4973 (代)・振替 東京 2-108464

印刷 株式会社 眞珠社

Printed in Japan

製本 イマキ製本所

書籍コード 1021-2103-3329

はじめに

水俣^{みなまた}へは、はるばると行きたい。

川崎から二十時間あまりをかけて船で宮崎県日向に着くと、海をこえて知らない土地に來たという実感がある。風も陽の光も、ひという明度が鮮やかで、経線をいくつか通りすぎてみると気候や自然がくつきりちがって見える。

終点の水俣に着くためには、九州山地を横切って、それから六時間あまり車を走らせなければならぬ。山をめぐれば水俣、という一步手前が鹿児島県^{おおくま}大口で、この辺でなぜかたいてい雨にあう。闇夜にどしゃぶりの雨、しかも山道で、とたんに心細くなって早く早く水俣へと気がせいってくる。到着するのは夜の九時か十時か。雨上りの水俣はひととき湿気が濃い。家を出てからたっぷり一日半、水俣ははるばると行くところだ。もちろん飛行機でピョンと飛んでゆくのも一つの方法だが、この距離感は大切にしておきたい。

この十年間というもの、春、夏の年二回、私達はこうして水俣を訪れてきた。水俣はいまもなお苦渋に満ちた地であり、どこよりも深く傷ついた聖域で、みだりに踏みこめない畏れを感じさせる。けれども、ひとたび不知火海に創られた風土や人々、そしてあの水俣病闘争の片鱗を知ってしまうと、その引力にはあらがいがたいものがあって、何度でも水俣へ行きたくなってくる。

不知火海総合学術調査団、というまことに長い、いくらか尊大な正式名称の研究グループがある。この調査団は、作家の石牟礼道子さんの、水俣のすべてをあらゆる学問の網の目にかけておきたい、という切望から結成された。五年という調査期間をくぎり、第一期（一九七六一一九八一）が色川大吉さん、第二期（一九八一―）は最首悟さんが団長をつとめている。団員は、社会学や経済学、政治学、歴史学、医学、民俗学、生物学、海洋学、等々という分野を専門にする学者達で、一期と二期をあわせると、その数は二十人くらいにもなろうか。水俣に医学以外の社会科学系の研究グループがこれだけの時間と労力をそそぎこんだのは初めてであった。複数の人間が共同で一つの目的に向かう過程は、決してきれいな事ばかりですまないものがある。調査団もたびたび激しい学問上の対立や考え方の衝突、確執がおこり、あわや分裂か、と思われることもあった。しかしともかく第一期のまとめは、『水俣の啓示』（上下、筑摩書房、一九八三年）に報告された。

私はこの調査団の一員である。むしろ社会科学者でも自然科学者でもない私は、もっぱら事務局、会計やニュースの発行、相互の連絡、宿や交通の手配といったいわば雑務に終始していた。その一方で

んなといっしょに、漁師さんや患者さんを訪ねる、という絶好の機会にも恵まれていた。芦北・田浦、津奈木・長島・天草・茂道・湯堂、行動範囲はじわじわと不知火海の岸辺にひろがってゆく。人々を訪ねるたびに、互いの緊張はだんだんほぐれて、水俣病という有形無形の深手をおってなお優しく、その試練ゆえに強靱な輝きを秘めた人々の貴重な話が、粉雪のようにサラサラとたまっていった。これは何とかしなくてはならない、そう思い始めたころ、私はほとんど同時に二人の人からまったく同じことを別々に言われた。

「聞き書は大切です。」

それは調査団の菊地昌典さんと石牟礼道子さんの意見で、けれど二人は暗に私にやりなさいと勧めたわけではなかった。話手に直接ふれる聞き書は大そうデリケートな難しい仕事に思えたが、調査団の一員として何かできることはないのか、私にできないだろうか、というきっかけの一言になった。すでに最初の水俣行きから四年が過ぎていた。

調査団という集団の中においても、当然のことながら、水俣と向きあうのはいつも個人、私一人にかえってくる。ときとして人々の口から、あまりにも生々しい経験が語られたり、訪ねることさえ拒まれたりすると、結局他人の苦しみの暗部など、とうていわからないのだ、ブラックホールのような核心へゆきつくことはありえないのだ、と自明のことをいたずらにくり返して、出口を失うことがある。

水俣に行きはじめた頃のことだった。胎児性水俣病患者——母親の胎内でチッソのたれ流したメチル

水銀禍にあい、生まれる以前に脳や身体に被害を受けた胎児性の少女から、相談があるといわれて二人で喫茶店に入ったことがある。その年、彼女は成人式をあげ、その写真も見せてくれる約束だった。振袖を着て髪を結い、晴れやかに緊張した写真のようすは、二十歳になっても、やはり少女という表現がぴったりあうようだった。少女は若者に恋をしていた。それは相談というより、誰かに片想いの辛さを訴えずにはいらなかったのであろう。絶望的なその恋の行方というものは、誰よりも彼女自身がよく知っていた。涙をうかべ、だんだんかすれてゆく言葉は、人が生きてゆくことで負ってしまう、ある本質的な不幸をも語っていた。私はただ、しきりにあいづちをうち、耳慣れない方言のせいだけでなく言語障害による聞きとりにくい一言一言に必死に耳をかたむけるしかなかった。

深い悲しみの瞬間に出会おうと、私には聞いて聞いて聞きぬくこと以外になすすべがなくなる。そして、せめてもう少し近くへ、ほんのわずかでもそばへ近よれば、と痛切に願う。

一人、二人と指を折ってみる。話者は歳月とともに確実に、つつましくやかに去っていく。水俣病という未曾有の惨劇の中から、不退転の闘いに立ち上がった人々の、今もそしてこれから逃れることのできない生活の中での闘いを続けている人々の、遺産とは何だろう。話を聞いている私達も、必ずいつか死ぬのだ、とはたと思いついて、放っておけばただ消えていってしまう人々の言葉を、文字という姿につなぎとめておきたいと心ばかり逸る。

不知火記
目次

はじめに i

明治・大正の水俣

前田 千百

佐敷 i

海が私の舞台

杉本 栄子

茂道 49

漁師八十年

下田 善吾

鶴木山 93

花の都の御所浦

白倉 幸男

大浦 135

大樹にいだかれた島に

湯元クサノ

湯ノ口

181

言わんばつまらん

井川 太二

女島

217

不知火海水俣病——その無言から

島田ユキエ

嵐口

249

あとがき

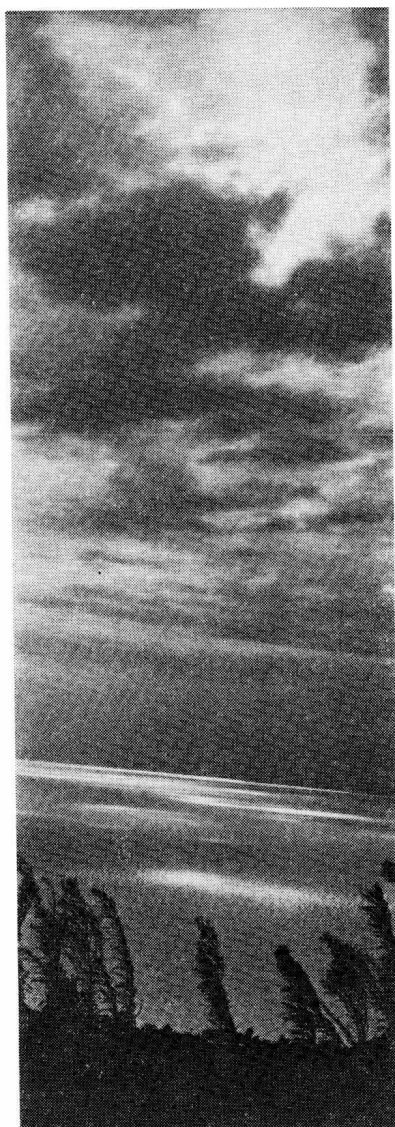
271

写真撮影 小林 茂

明治・大正の水俣

前田千百

佐敷



ピラカンサという常緑樹を覚えた。覚えてみるとピラカンサの実は東京の初秋の風景をずいぶん色どっているのに気がついて、他家の垣根や庭木を知らずぼんやりとながめていることがある。だいたい色より赤い実の方がやっぱりいいな、と思ったりしながら。この樹を見かけると、遠く熊本県の南部に住んでいた一人の小柄なおばあさんを思い出す。おばあさんの名は前田千百といった。

千百さんの家の入口には、枝も幹もどうどうとして全体がのびやかに成長したピラカンサの銘木が立っていた。初めて訪れたそのときは八月だったのに、南国の実のつき方は早いのだろうか、樹には鮮紅の小さな玉が、それこそびっしりと熱々とついていた。私をつれてくれた調査団の先生達は、思わずといった調子で声をあげた。

「ほう、これはみごとですね。」

みごとなのはそれだけではなかった。庭はすみずみまできれいに掃き清められて枯草一本糸くず一つ落ちてはいなかった。水の打たれた庭石を踏んで玄関から奥座敷へ案内されると、私達の人数にあわせて座ぶとんが用意され、順に出されるお茶の道具もお菓子もびたりと次の間にそろえてあった。客を接待する手順は流れるようであり、そのようなこの人の全身から「刀自」という、もう死語になりつつある言葉の本来の姿を、のちのちにわたって教わったように思う。

千百さんの家は芦北郡芦北町、旧佐敷町の一画にあった。水俣市から車で三十分程離れた佐敷は古い格式のある町で、高い建物といってもせいぜい四、五階止まり、民家の屋並のあいだに田が空間をつくっていた。どこかおき忘れられたような穏やかなたたずまいは、水俣の市街地を何か瘴氣に充ちたもののように思いうかべた。

しかし、千百さんが生まれたのは佐敷ではなく水俣もその中心の浜町で、佐敷に移ってきたのは昭和三十年代であった。身は他所においてもその心は常に水俣にあったにちがいない、故郷を語るときなみなみならぬ思いを感じさせた。八十歳の千百さんは高齢ながらまだまだお元気で、動作一つにもテキパキとリズムがあり、記憶力はたいしたものがあった。話術にいたっては中味の濃さといい、語り口のうまさといい、拔群のおもしろみがあった。が、千百さんのことにふれるには、まずその兄、前田永喜とチッソの創成にふれなければならない。

チッソ株式会社はことわるまでもなく熊本県南端の水俣とその周辺、不知火海沿岸一帯に水俣病を発生させた企業である。水俣の人々はこの会社の誕生から立ちあっていた。思いをこめて、これを育て、そして育てられた者達は、チッソというより改名前の日室（日本窒素肥料株式会社）という名称にこそ、郷土人の誇りと愛着を抱いている。水俣人はこの「日室」を思うとき、涙ぐむようなせつない感情をかきたてられるらしい。水俣が、まだ海辺のほとりの寒村にすぎなかった、明治四十一（一九〇八）年八月、野口遵のぐちしたかうの手によって日室はカーバイト会社として生まれた。そのころ戸数三千戸ほどの静かな水俣にはこれといった産業もなく、わずかに塩と木材だけが産物といえは産物であった。

塩田は寛文七（二六六七）年、水俣惣庄屋兼代官の深水家^{ふかみ}のすすめで造られ、明治末期には三十四町二反の広さになっていた。塩の専売制によって廃止されるまでの二五〇年間、塩田からは良質の塩が作られたという。年間一斗俵で十萬俵を産出し、その七十パーセントは肥前、島原方面へ出され、代りにソーメン、たたみ、瓦等が輸入されていた。この塩田のほか、漁業とわずかな田畑、木材運搬、零細商業のみで、村の基盤は実につつましいものであった。明治の気吹^{いきぶき}にふれた若い地主達が財産を投げうってこの地に事業をおこそうと考えたとしても不思議ではない。いったい彼らは芽ぶいたばかりで、海のものとも山のものともつかない小さな工場にどんな夢を見たのだろう。まだ見ぬ花は夢にみたようにひらいたのだろうか。だが、このカーバイト会社を呼ぶのには、かなりの時間を要したのである。

当時野口遵は鹿児島県伊佐郡曾木^{そぎ}に発電所を持ち、この電力を利用して工場を運転しようとしていた。それには水俣の地はあまりにも不便であった。工場候補地には佐敷、米ノ津^{こめづ}などがあげられ、なかでも鹿児島県の米ノ津は最有力地だった。そこには築港があり、距離も水俣より発電所から八キロも近かったのである。

日室のこのような創成を語るとき忘れてならない一人の男がいる。それが千百さんの実兄、前田永喜^{えいき}という人物なのである。野口が曾木電気の余剰電力を利用してカーバイト工場設立を計画していると知るや、彼は熱心に水俣への誘致にのり出した。村の有志をつのつての活発な説得工作が始まる。

(1) 米ノ津より発電所から八キロ遠い分の電柱と電線は負担する。(2) 港はただちに改築する。(3) 土地が相場より高値なら村が負担する。

これだけの条件を出し、彼は自宅まで事務所に提供したのである。

野口はついに予定を変更し、水俣を選んだ。

前田永喜は明治十（一八七七）年、当時村の中心地であった浜に、前田忠規、貞尾夫妻の長男として生まれた。前田家は内村屋の屋号をもち、徳富蘇峰、蘆花を輩出した徳富一族の系列で、水俣では指おりの旧家である。江戸末期から明治にかけて水俣で名望家の名をほしいままにした徳富家を興したのは、元文三（一七三八）年、水俣村に生まれた徳富太多七であった。彼は肥後をおさめていた細川家からそれまでの郡筒小頭から惣庄屋兼代官に任命され、水俣、津奈木の手永（代官）を務めた。この太多七の次代に北酒屋、浜田倉、新酒屋の三家に徳富家は分かれ、前田家もこの頃分家したらしい。前田家は御赦免田という、藩主の特別の許しによって年貢を免除される田を持ち、そのことは水俣ではかなりのステータスを意味した。

永喜がどのような教育を受けたかはよくわからない。彼の八、九歳当時開校されていた蘇峰経営の大江義塾水俣分校（後楽館）で、あるいは学んだかもしれない。

「地主の所は、どこも子供を東京の大学に留学させたっすな。私立大学ばかり、早稲田か明治ですね」（久場五九郎「増田吉治聞き書」『水俣工場労働者史』所収）。

ただし前田永喜は名古屋あたりへ遊学したらしい。彼は二十代前半に、大江女学校に在学中の従姉妹、園田冬と結婚した。この園田家も水俣の名望家で、お嬢さん育ちの冬はのちのち苦労のたえぬ生活をおくることになる。永喜は、すでに水銀銀行を手

始めに、猛烈な事業欲に燃えていた。一生のうちでどれだけの仕事に手を染めたのか、とにかく、水俣銀行、水俣郵便局、精米所、廻船業（朝鮮まで木炭を運搬）、布計金山（ふけ鹿児島県大口）、等々わかつていただけでも五指にあまる。しかし、どれも成功にはいたらなかった。各地をとび歩く永喜は家を空けることが多く、妻は金の工面に着物を売り忍耐の日々を強いられた。晩年、彼は五百円で町の北東に位置する桜が丘（べんとやま紅土山）の斜面を買い、まだ戦前のことで当時としては珍しかったみかん園と養鶏業を営むが、「まるであばらやのような家」（前田京子談）で一生を終えた。

彼はなぜ、かくも次々に新しい事業を追い求めたのか。永喜の末娘にあたる前田京子さんはこう言う。「一つの仕事が入りまくいきはじめると、さっと手を引いてしまう。飽いてしまうのでしょうか。軌道にのせるまでが面白いようでした」。これではまるで道楽に近い。

前田忠規は大切な山や田畑を次々に手放してしまふ長男永喜に見切りをつけ、とうとう廃嫡してしまった。水俣の地主や銀主層の中には、彼のように事業から事業へ渡り歩いたり、あるいは女や飲食にゼいたくのかぎりを尽して財産を失った者がかなりいた。彼らは明治という新時代の中でリーダーを失った鳥のように狂舞しながら落ちていった。そうして永喜は多くの遍歴の途中で、後に日室社長となる野口遵と出会うのである。野口の基好きは有名だが、永喜との結びつきもやはり基が遠因らしい。

あとから野口さんは父に杜宅の一番良い家に住んでいいと言ったらしいですが、父はとうとう移らずにですね、前田の御隠宅におりました。日室にそのままずっとおれば上役にもなったのでしょ